

シティプロモーション・スポーツ調査

特別委員会 行政視察報告書

1 日程

令和5年10月26日（木）～ 27日（金）

2 視察先及び視察項目

	視察先	視察項目
1	北海道千歳市	千歳市観光振興プランについて
2	北海道北広島市	ボールパーク構想について

3 視察委員

- 委員長 大 橋 たけし 大田区議会公明党
- 副委員長 湯 本 良太郎 自由民主党大田区議団・無所属の会
- 委 員 えばさわ圭 介 自由民主党大田区議団・無所属の会
- 松 本 洋 之 大田区議会公明党
- 鈴 木 ゆ み 大田区議会公明党
- 清 水 菊 美 日本共産党大田区議団
- 鈴 木 ひろこ 日本維新の会大田区議団
- 宮 崎 かずま 日本維新の会大田区議団
- 須 藤 英 児 つばさ大田区議団
- とく山 れいこ 東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会）
- 庄 嶋 孝 広 立憲民主党大田区議団

4 視察報告

項目ごとに各会派の視察報告を記載。

(1) 北海道千歳市

◆視察項目

千歳市観光振興プランについて

(自由民主党大田区議団・無所属の会)

千歳市は新千歳空港があり、北海道の空の玄関口としての顔を持っている。

一見すると、人の集客が容易に思えるが、空港に降り立ち札幌をはじめ道内各地に人が通過する場所となっていた。これを改善し、千歳市に人を集めるために何をしたら良いかを考え、観光資源の活用をはじめ、街の魅力をより分かりやすく、タイムリーに発信することを工夫した。

観光資源としては、支笏湖や温泉、市や道・民間企業が整備した施設など数多くあり、季節によって楽しめる観光資源が多くある。個人的な感想としては一度訪ねて終わりではなく、四季の異なるタイミングで何度も訪問したくなる魅力を千歳市の発信から感じた。

空港がある市ではあるが、素通りされる市であったため、効果的な発信を行う事により空港近くで立ち寄れる市へと変化し、コロナ禍の影響を除けば観光客は年々増えている。

我々、大田区が目指したい街へと変化した千歳市の取組は非常に参考になり、大田区のシティプロモーションにも取り入れられる要素が多くあると考える。

観光客の誘致に留まらず、観光的魅力に魅了され、市の人口は増加している。

市民の平均年齢は42.9歳と全道一若い街であることに驚かされた。

街の魅力を発信し、その魅力により短期滞在の旅行客が増え、最終的に現役世代の人口流入まで起こすというこの現象に、シティプロモーションの可能性を感じた。

シティプロモーションに重きをおき、施策展開に取り組むか否かで街の未来が変わるかもしれない。

(大田区議会公明党)

千歳市は新千歳空港を玄関口とし、周辺の自然や温泉、アウトドア活動など多彩な観光資源を有し、またそれを最大限に活用し、観光客を誘致している。

千歳市の新千歳空港と大田区の羽田空港は、地域の観光振興において重要な役割を果たしていることや、両地域は国際観光市場に焦点を当てており、国際線便



の増加や多言語対応など、海外観光客の誘致を目指している事が共通点といえる。

今回の視察を参考として、大田区のシティプロモーションにおいて取り組むべき課題は以下のようなものが考えられる。

- ・ターゲット市場を明確にし、その市場に合ったプロモーション戦略を立てることが重要。顧客のニーズや関心に合致する情報を提供し、魅力的なコンテンツを制作すること。

- ・ウェブサイト、ソーシャルメディア、オンライン広告などのデジタルプラットフォームを活用し、情報を発信する力を高めること。ウェブサイトは視覚的に魅力的で使いやすいものにし、ソーシャルメディアで観光情報を積極的に共有。

- ・観光情報、写真、ビデオ、ブログ記事などのコンテンツを充実させ、訪問者に価値を提供。地域の観光スポット、食事、アクティビティ、文化、歴史などに関する魅力的なコンテンツを制作し、共有。

- ・地元の企業、観光業者、観光協会などと連携し、シティプロモーションの力を強化すること。共同プロジェクトやキャンペーンを立ち上げ、情報を共有することで相乗効果を生み出す。

- ・観光業は環境に大きな影響を与える可能性があるため、持続可能な観光振興に向けた取り組みが重要。環境への配慮やエコツーリズムの促進などが必要。

これらの課題に対処するために、大田区は区民や地元企業と連携し、継続的な戦略を策定し、地域振興と観光振興を推進することが重要と考える。



(日本共産党大田区議団)

千歳市観光振興プランについて観光スポーツ部主幹の方から説明をしていただきました。千歳市は大田区と同様に新千歳空港があり、交通アクセスが良い都市です。人口は増加し、平均年齢は42.9歳と全道一若いことに大変驚きました。市の面積は東京23区とほぼ同じで、農村地区、市街地区、支笏湖地区と3つの地域にそれぞれ特色があり観光資源が豊富であり、大きな魅力を感じました。



観光振興プランは令和4年5月に策定されたとのことですが、ことに新型コロナウイルス感染症の影響により観光を取り巻く環境は大きく変化しているために、変化に柔軟に対応する中期的なプラン（令和4年度から7年度までの4年間）にしたことは重要であると思いました。目標値の設置が観光入込客数、宿泊延べ数、観光消費額単価であることは参考になると思います。ウィズコロナなど時代背景にあった観光振興の創出についても大変参考になりました。体験型、コト消費、千歳市でしか体験できない唯一無二のプログラムの取り組みなど大変努力をされていると思いました。中でもアドベンチャーツーリズムの推進は北海道ならではであり、長期滞在で消費が大きいものがあると思いますが、大田区ではなかなか望めないものではあります。地域資源を生かすことはもっと考える余地はあるかと思えます。

空港のある街が「通り過ぎる街にならない」この点は我が大田区とも同様です。千歳市の豊かな自然を生かした観光振興プランの説明を受けて、大田区にどのように生かすことができるか、今回の視察を参考に提案ができるようにしていきます。

(日本維新の会大田区議団)

今回の視察では北海道千歳市を訪問し、千歳市役所担当者より『千歳市観光振興プラン』につき、ご説明頂いた。千歳市は、新千歳空港を有し、空港と中心都市（札幌市）の間に位置する点で、大田区と性質を同じくしていた。空港と中心都市との間に位置する街では、いわゆる空港利用者の素通り問題が浮き彫りになることが多く、千歳市では『よりみちとせ』をキャッチコピーに、大自然を活用した観光施策を打ち出し、マーケットバリューを獲得していた。『よりみちとせ』については行政内からのアイデアで誕生したと仰っており、我が大田区においても明瞭かつ簡潔なキャッチコピーを考案すべきと感じた。



また、同市の観光ウェブサイトが大田区シティプロモーションサイト『ユニークおおた』と比較して月間来訪者数が2倍であることを下調べしていたので、観光資源の‘見せ方の秘訣’を伺った。その答えとしては、やはり需要の多い飲食店を豊富に載せること（約300店舗掲載）、そして開発がされていない支笏湖をはじめ、大自然をありのままに表現しているというものだった。



以上2点については、その効果を精査し、是非とも大田区の観光・シティプロモーション施策にも活用したいと考える。

(つばさ大田区議団)

●千歳市の人口 96,965 人（令和5年4月1日時点）、平均人口 42.9 歳（全道一若いまち）、面積 594.50 km²

I 千歳市の観光地区は、支笏湖地区、農村地区、市街地区の3つ

①支笏湖地区は透明度の高い支笏湖、二つのキャンプ場、昭和42年冬期オリンピック滑降競技会場となった恵庭岳、温泉宿泊施設など。

②農村地区は地元野菜、果物、牛乳を原料にしたアイスクリームなどを提供するレストラン、搾乳や乳製品づくりなどの酪農体験ができる施設など。

③市街地区は2本の3,000mの滑走路を持つ新千歳空港、アウトレットモール、ビールやワインの工場見学など。

II 千歳市の地域特性

●千歳市は交通利便性が高く、多様な観光資源がある。札幌市近郊において、観光入



込客数は札幌市、小樽市に次いで第3位。

●羽田空港と新千歳空港の間の航空路線は需要が多く、単一路線としては便数世界一。

●千歳市には、ラピダス社による世界最先端・最高水準の半導体製造拠点が出来る予定で、更なる発展が期待できる。

◎大田区政に活かす事

羽田空港からの観光客の大田区内滞留者を増やすために、レンタカーやレンタサイクルなどの利用施設を増やす。

(東京政策フォーラム (都民ファースト・国民民主・無所属の会))

【概要】

千歳市観光振興プランとは、千歳市が有する特性や優位性を活かした魅力ある観光地づくりを進めるため、千歳市の観光が抱える課題や、今後の観光振興の基本的な方向性、具体的な施策を内外に示し、観光関連機関・団体や事業者、市民の方々と連携しながら、観光振興による地域経済の活性化に取り組むための指針として策定。

【会派所感】

「ヨリミチトセ」北海道の空の玄関である新千歳空港が存在し、観光客にとっては、札幌市へ向かう途中の通過都市となってしまう、同じく空の玄関である羽田空港が存在する大田区と同様の課題を抱えていた千歳市。途中下車を促すための魅力あるコンテンツをいかにして作り出すかが重要であった。そこで、3つの解決方向性を明示。「ウィズコロナ等時代背景に合った観光振興」「地域資源を生かしたツーリズムの創出」「観光客の受入環境整備と誘致宣伝活動の推進」。



コト消費のニーズからキャンプなどのアウトドアコンテンツを推進していたことが特徴的だった。実際、モノ消費からコト消費へシフトしたコンテンツ造成をしたことで、観光入込客数も増加している。現在、日本ではコト消費に対し、フォーカスがあまりあてられていないが、欧州ではモノ消費よりもコト消費が主流。千歳市では、海外観光客と接する機会が多く、コト消費に対する地域の意識が醸成されていたことも背景にある。今後、コト消費需要が主流となることを必須とふまえ、大田区でも大田区でしか体験できない唯一無二のプログラムの策定が必要となりうる。また、ご担当者の方が、「地域のかたがやりたいことをサポートする」とおっしゃっていたのがとても印象的だった。行政の力だけで推進していくのではなく、何よりも大田区をよくご存じの地域のみなさんのやりたいことを後押しし、サポートしていく形のほうが、より大きく発展していくのではないかと思った。

(立憲民主党大田区議団)

千歳市は、新千歳空港のあるまちという点で、羽田空港をもつ大田区との共通点があります。目下、次世代半導体の国産化をめざす新会社ラピダスの進出も決定しており、人口は増加中で近々10万人を超える勢い、平均年齢も42.9歳（平成27年国勢調

査)と全道一若いまちでもあります。

観光の面でも、名だたる観光地のある北海道にあって、コロナ禍以前は観光入込客数が約500万人前後で推移するなど、札幌近郊では、札幌市、小樽市に次ぐ第3位となっています。

そのわりに、私自身、「千歳市＝観光地」というイメージは持っていませんでした。それは、小樽市に比べても道外からの観光客の割合が低いこと、市域が広く(東京23区とほぼ同面積)、支笏湖など個別の観光地の名前で知られていることなどがあると考えられます。

視察テーマである「千歳市観光振興プラン」は、令和4(2022)年5月に策定。本来は前計画(千歳市観光振興計画)を引き継ぎ10年計画の予定でしたが、コロナ禍の影響を受け、令和7(2025)年度までの4年計画となっています。

ウィズコロナ・アフターコロナを見据えた内容になっており、目標値(KPI)も令和7年度の観光入込客数を286万人として、コロナ禍以前に比べて控えめである一方、宿泊者延べ数の24万人は、令和4年度実績で33万人とすでに上回っています。

プランで力点を置いているのが、アドベンチャーツーリズム(AT)。千歳市には、地域資源を生かした、支笏湖をE-BIKEやカヤックでめぐるコース、千歳川をカヌーで下り縄文やアイヌを感じるコースの2つの日帰りコースがあるとのこと。

大田区にびたりと当てはまる内容ではなかったかもしれませんが、「ヨリミチトセ」というキャッチフレーズが象徴するように、「通過型のまち」の悩みは共有できる場所です。空港があるまちのメリットを生かした観光についてさらなる研究が必要です。



(2) 北海道北広島市

◆視察項目

ボールパーク構想について

(自由民主党大田区議団・無所属の会)

建設予定地にサッカー場や野球場、陸上競技場など色々なものを作る構想、計画が上がり、野球場についてはプロ野球の2軍を誘致できるような球場にしたいとの思い

で、規模などを含めた北海道日本ハムファイターズとの意見交換から、担当者より本拠地が欲しいことや街と一緒に盛上げていきたいこと、海外のボールパークのような施設を作りたいとの提案に北広島市も本腰を入れ計画をスタートさせるきっかけとなったとの説明を受けた。



構想スタートに関し法律的に無理なことは仕方がないが、前例が無い、難しいから出来ないなどと言わないとの合言葉は、新しいことを始める時や先進的な取り組みには必ずハードルとなる言葉を最初に排除して、若い人たちの意見を多く取り入れることなども、今後の行政運営の手本となる取り組み方がとても良いと感じた。

ボールパーク名はFビレッジとなり、その中の核となる新球場のネーミングライツは日本エスコンが取得し、新球場名はエスコンフィールド北海道となり、本年3月に無事開業となった。

Fビレッジのエリア計画は本年3月の開業から2026年の4年間でフェーズ1として、その後4年区切りでフェーズ5までの計画があるが、まだフェーズ2以降の計画は正式決定ではなく、開業後のお客様のご意見、時代の変化や流れも含めて、その時にあった望ましい開発、改善をお客様と一緒に進化させていく「完成しないボールパーク」「進化し続けるボールパーク」という考え方と未来へのビジョンが素晴らしいと感じた。

構想から計画、設計と進んでいく中で、設計前にニーズを把握することは大切であるが、完成後の時代のニーズや利用者の意見を柔軟に取り入れることが出来るなど、参考にできる部分が多くある。

出来ない説明ではなく、どのようにすれば出来るのか、出来る事を考え、進めてきたボールパーク構想の視察は、今後の提案を考える良い学びとなった。

(大田区議会公明党)

北広島市役所にて「ボールパーク構想のこれまでとこれから」と「ES CON FIELD HOKKAIDO」のスタジアム視察を行いました。

ファイターズ新球場である「ES CON FIELD HOKKAIDO」は、ファイターズ球団事務所への誘致活動などを経て、きたひろしま総合運動公園予定地に正式に決定し、建設期間は、令和2年4月より令和5年1月のわずか32か月間で、特に冬期の雪の時期には、大量の雪かきを行いながら工期厳守に向けて作業員をはじめ関係者が団結して乗り越えた様子がとても感動的でした。



スタジアムは、世界のどこにもない世界初のスタジアムを作ろうとの心意気にあふれた素晴らしい球場でした。屋根が可動式になっており、球場内にはホテルや温泉、サウナ、子どもたちの遊び場など、野球を見ながら楽しめる工夫がいっぱいでした。

またフィールドとの距離が近く臨場感もあり、野球に興味がありませんの方でも観戦してみたいと思わせてくれる球場でした。来場者についても、試合がない日でも開放しているため、休日でも1万人程が来場し、地元だけでなく全国からという状況もあり行楽地化しているようです。SNS効果や野球以外のトレンドを求め、特に20代の来場者比率が高いとの事でした。

ボールパーク構想の今後についても、世界でも前例のないプロジェクトを実現しようと、新球場を中心に官民連携で新しいまちづくりが推進され、これからますます魅力的な地域に発展することが期待されています。

北海道日本ハムファイターズの「既成概念にとらわれず夢を持った挑戦をする」という経営理念と北広島市の「どうやったらできるかの追求」のモットーが掛け合わせり、どのような場所に成長していくのか今後とても楽しみです。

大田区においてもシティプロモーション構想を官民連携で戦略的にかつ大胆に進めていけるよう参考にしてまいります。

(日本共産党大田区議団)

ボールパーク構想のこれまでとこれからについて、北広島市経済ボールパーク連携推進課主査の方から説明をしていただきました。

誘致の経緯についてのご説明はとにかく驚きの連続でした。人口わずか6万人弱の北広島市が人口約190万人の札幌市に競り勝ち、日本ハムファイターズの新球場に決定したこと、3年半の期間で冬場にも建設工事を進めたこと、新球場のみならずボールパークとして様々な施設を置きこみビレッジ(1つの街)を作り上げ、まだまだ発展途上であること、等々、だれもやったことがないことを「どうやったらできるかの追求」という北広島市のモットーを、直接お話を聞くことができたのは、大変貴重な体験でした。某テレビ番組で担当課長のお昼ご飯がおにぎり1個で3分しか時間がないというのを見て「そんなことがあるのか」と思いましたが、担当課長の仕事量は想像をはるかに超えるものだったでしょう。



「昭和40年頃からお金がなくて運動場ができなかった。塩漬けの土地があったから」とのことでしたが、市長の決断と職員の努力があればこそと思いました。

球場を約1時間かけて視察できたこともよかったです。試合のない日にも入場者が出かけていきやすく、観光客だけでなく市民が楽しめる施設となること、冬場も楽しめるなど今後に期待します。当たり前のことで恐縮ですが、市民の福祉の向上と地元中小企業、農業者、などへの施策の充実を望みます。

大田区においてはこのような施設やまちづくりは無理でしょうが、「ボールパーク構想実現に向けてのカギ」「既成概念にとらわれず夢を持った挑戦をする」は、大いに参考になるとおもわれます。

(日本維新の会大田区議団)

北広島市では、北海道日本ハムファイターズの新球場誘致にあたり、誘致表明までの間の球団との意見交換にあたり、市が目指す都市像と球団の企業理念が同じ方向性であることを確認し、新球場を核に賑わいや交流を創出するエリアとなるボールパークの整備を契機として地方創生を図ることが、目指す都市像の実現に大きく寄与すると考え、球団とまちづくりについての想いを共有しながら協議を重ねてきました。



視察は、まず北広島市議会にお邪魔し、坂本覚副議長からご挨拶をいただき、ボールパーク構想については、連携推進室主査の方から大変熱量を感じるご説明をいただきました。

ファイターズ誘致の経緯から→きたひろしま総合運動公園予定地でのボールパーク建設が正式に決定する→新球場「エスコンフィールド北海道」の建設工事に着工から竣工、北海道ボールパークFビレッジを多角的に作り上げていく施設は以下に続きます。

①TOWER11（フードホール/温浴・サウナ/宿泊施設）②ブルワリーレストラン③七つ星横丁エリア④遊び場（キッズスペース）⑤キッズプレイフィールド⑥グランピング/体験型アウトドア施設⑦農業学習施設「KUBOTA AGRI FRONT」⑧認定こども園/病児保育⑨ヴィラ/宿泊施設⑩ベーカリー/レストラン⑪アドベンチャーパーク⑫ドッグ・パーク⑬ザ・ロッジ⑭レジデンス（分譲マンション）⑮シニアレジデンス。

驚くばかりですが、Fビレッジにいれば生きていけると言えば言い過ぎなのでしょう。

北広島市役所からエスコンフィールド北海道に移動してスタジアムツアーにも参加し、計算され尽くしたスタジアムにも感服いたしました。

テーマパークとスタジアムを兼ね備えたようなこの場所には年間 300 万人以上の人々が来場します。

本区でも大田スタジアムをはじめ様々な地域で新たなシティプロモーションにさらに力を入れていく取り組みを考えていきたいです。

（つばさ大田区議団）

●北広島市の人口 56,950 人、世帯数 28,257 世帯（令和 5 年 9 月 30 日時点）、面積 119.05 km²

●新球場誘致にあたり、北広島市と北海道日本ハムファイターズ（日ハム）は、まちづくりについての想いを共有しながら協議を重ねた。

●ボールパーク内にはホテルも建ち、マンションは完売。北広島駅周辺も、ホテルや住居の開発が進む。北広島市の方々も人口増加に期待している。北広島市内には小学校から大学まである。

I 北広島市と日ハムによる新たなまちづくり

①食べる・遊ぶ→ブルワリーレストラン、キッズスペース、温浴・サウナ

②子育て・学ぶ→認定こども園・病児保育、元野球選手によるキャリア教育、その他

③多様な世代が安心して暮らせる医療・福祉や商業等の都市機能の整備→定住人口の増加

④交流人口の増加→駐車場の増設、体験型アウトドア施設、農業学習施設

⑤防災拠点機能の整備・強化→避難所機能・防災備蓄機能の整備

⑥地域の暮らしを支える交通アクセスの改善→新駅の新設と北広島駅のホームの改修、新設アクセス道路、道路の4車線化

II ボールパーク来場者数と傾向について

●令和5年9月28日のホーム最終戦で300万人に到達

●試合のない日の来場者数は平日4,500人、休日10,500人が来場

●地元だけでなく遠方（全国）からの来場もあり、行楽地化している

●Fビレッジ来場者の約3割が野球観戦者以外の来場者

●Fビレッジ来場者は道内約7割、道外約3割の構成

●20代の来場者比率が上昇（SNSによる影響力や野球以外のトレンドを求め来場）

◎大田区政に活かす事

①ボールパーク構想実現のカギである「既成概念にとらわれず夢を持った挑戦をする」、北広島市のモットーである「出来ないことが証明されていないならやってみよう」の精神を大田区にも浸透させる。

②官民連携プロジェクトは、官と民の目線合わせが重要。

（東京政策フォーラム（都民ファースト・国民民主・無所属の会））

【概要】

北広島市には、居住、観光、ビジネスにおける交通利便性と豊かな自然の中での暮らしが共存するポテンシャルがある一方で、急速な少子高齢化、人口減少による活力低下や、地区の分散と都市機能の不足、流出が現状課題として生じています。未整備公園をきっかけとした官民連携プロジェクトとしてボールパークを整備することで課題解決を目指すものです。

【会派所感】

野球場という機能だけではなく、急速な少子高齢化という課題のある中で、子育て世帯が利用する施設として、子どもたちに大人気のポーネルドの有料あそび場「リポビタンキッズ PLAYLOT by BørneLund」がありました。国内最大規模の遊び場となり、野球観戦の日はもちろん、野球の試合のない日でも大人気ということで、しっかりとお休みの日でも施設へ誘致できるような導線をひかれていました。

しかしながら、現地のタクシーの運転手さんにお伺いした話が印象的でした。「現状、最寄り駅である北広島駅周辺はベッドタウンで、飲食店やホテルなどもなく、遊びに来てもまた夜にはほかの駅に戻ってしまい、地元にお金が落ちない。」とおっしゃっていました。ボールパーク内では、飲食・宿泊施設が備わっており、ボールパーク内で完結できるつくりになっています。ボールパーク近辺に新駅構想もあり、より一層、人々の回遊が減少する仕組みとなるかと思えます。もし仮に、大田区でも同様の取り組みが行われることになった場合、地元周辺にお住まいの方やそこでお店を営まれている方々にもご理解をいただけるような、施設と街を自然と回遊できるような仕組み

づくりが一番重要なのではないかと思いました。

(立憲民主党大田区議団)

JR千歳線の北広島駅で下車。改札を出ると、すでにそこには「F V I L L A G E」のフラッグ。一方、構内の掲示板を見ると、「団地住民センター便り」。駅から北広島市役所に向かう車窓からは団地が見えました。

令和2(2020)年の高齢化率は33.1%と、前日視察した千歳市の25.3%に比べると10%も高く、人口も平成19(2007)年の61,199人をピークに下がり続け、令和5(2023)年9月30日現在で56,950人。社会増が自然減を追い越せないでいるとのこと。

そんな中、北海道日本ハムファイターズの新球場「エスコンフィールドHOKKAIDO」を含む「北海道ボールパークFビレッジ」の誘致に成功し、令和5年3月に開業。10万人未満の都市で唯一、プロ野球12球団のホームタウンとなりました。

ボールパークの地は、総合運動公園予定地であった雑木林。資金がなく着手できないまま、昭和40年代から塩漬けになっていた土地。そこに、借り物の札幌ドームではなく自前の新球場を持ちたいと考えるファイターズの候補地探しに応じ、平成30(2018)年10月31日、札幌市との誘致合戦に勝利しました。

もともと、誘致したのは球場だけではなく、まち。エスコンフィールドが中心施設ですが、集合住宅、認定こども園、商業施設、宿泊施設、農業体験施設などを持つまちです。現在、ボールパークは、北広島駅から1.5km離れていますが、新たなまちの誕生により、新駅もできる予定です。

市役所でボールパーク連携推進課からお話を伺った後、エスコンフィールドのスタジアムツアーに参加。北の大地が紅葉に染まる季節、多くの観光バスが乗りつけ、年齢や性別に関わらず、多くの観光客が訪れていました。試合のない日や季節でも楽しめる球場であることを実感しました。

公民連携の羽田イノベーションシティをもつ大田区にも比較対象となる取組でした。

